学びや タイムスリップ

① 望火楼 （明治時代）

消防拠点だった番組小

京都では、1869（明治2）年、市中で64の「番組小学校」が誕生しました。当時の京都は、どんどん焼け（蛤御門の変）や幕末の物価高騰などの大混乱を経た、復興期にあたります。

そうした中、幕末に手跡指南所（寺子屋の一種）の師匠・西谷艮圃を中心とした市井から生まれた小学校創設のアイデアが、明治になり京都府と地域とのやりとりの中で具体化します。中世以来の自治組織である町組に起源をもつ「番組」（後の「学区」）に1校ずつを原則とした番組小学校ができました。

番組小は教育の場であるにとどまらず、地域のコミュニティーセンターとして京都の復興を担う使命を背負っていました。町組会所のほかに、徴税、戸籍、消防、警察、府兵駐屯所などの施設が併設されていきます。

当初は100坪程度の敷地が多く、通学率の上昇ですぐに手狭になりました。ゆえに多くの学校で、開校の2、3年後から移転・新築が始まります。その際、かつて番組から府に建設を願い出ていた本格的な望火楼が設置されていきます。

望火楼とは「火の見櫓」とも言い、火事をいち早く発見し、半鐘を鳴らして知らせるための場所です。望火楼を備えた小学校は地域の中心・象徴にふさわしく、学区で最も高い建物でした。

また、望火楼には住民に時刻を知らせるための報時鼓も置かれました。日彰校（現高倉小学校、中京区）のように五層の最上層を望火楼、次層を鼓楼とし、望火楼と鼓楼を分けた例もあります。

上の写真は、元下京二十四番組小学校（後の有済校、東山区）の望火楼です。元番組小学校の望火楼として、現存する唯一の望火楼です。明治時代にでき、2005（平成17）年には、国の有形文化財に登録されました。

もとは木造校舎の屋根上にありましたが、1952（昭和27）年の改築時に、新しい校舎に移築されました。京阪三条駅の南側ロータリーに面する元有済小校舎の屋上に、今も見ることができます。

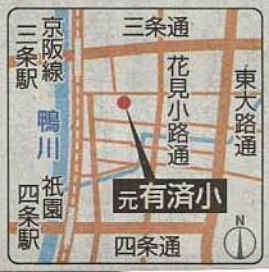
望火楼の写真のほか、明治期の小学校の姿は、学校歴史博物館の常設展示室でご覧いただけます。

（京都市学校歴史博物館学芸員　和崎光太郎）

◇

京都市学校歴史博物館（下京区御幸町通仏光寺下ル）の収蔵品を通して、学芸員が京都の学校の歴史や子どもたちの暮らしの変遷を解説します。

＝日曜掲載

大正時代の有済小の望火楼（京都市学校歴史博物館提供）

元有済小校舎の上に残る望火楼（京都市東山区）